

## 中国雲南班

## 中国雲南班の活動

阿部健一（国立民族学博物館・地域研究企画交流センター）

## 0 はじめに

中国雲南班の活動の全体像については、昨年度の報告書で比較的詳しく記述した。背景、目的、フレームワークなど、大枠において変わらない。ここではそれを繰り返すことはせず、今年度の活動報告と次年度の計画に重点を置いて報告する。中国の若手研究者が主体となり、特定の民族・地域に密着した研究を行う「雲南民族生態史チーム」を経糸とし、日本人研究者による明確な課題を設定した上で民族・地域横断的な研究を行う「雲南環境史チーム」を横糸として絡ませるのが、雲南班の活動のフレームワークである。手順として、「雲南民族生態史」の活動が先行することは計画の全体像を示した中で触れたが、今回報告するのは、この「雲南民族生態史」の研究活動の進捗についてである。

## 1 今年度の活動

## 1-1 国際ワークショップ『生態史項目中期評価会議』開催

活動計画に従い、10月11・12日の両日、雲南大学で第一回の中間研究発表会を行った。2日間で26という数多い発表となったが、それでも、雲南側のメンバーのうち5人が中間報告会の時点でフィールド調査を継続中であり、今回は発表を見送っている。

詳細は、添付したプログラムを見ていただきたいが、対象とする民族・地域の点でも、研究の焦点のあてかたにおいても、実にさまざまな研究発表が、ぎっしり詰まった中間報告会となった。一人当たりの発表時間は15分、質疑応答も15分。発表はパワーポイントを使用し、視覚化とともに時間の短縮につとめ、発表者とのやり取りをできるだけ長くするようにした。英語によるプレゼンテーションを行った者もいるが、発表の多くは中国語で行われ、同時通訳で英語に翻案された。なお、中間報告書は全員が提出し、当日配布された。当初は、中国語で執筆された中間報告書を英語／日本語に翻訳し、日本側参加者に事前に配布する予定であったが、時間不足から実現できなかった。

この中間報告会の目的は、比較的若手の多い雲南側のメンバーの研究成果を相互検討し、共通課題「雲南生態史」に向けて、研究の質的向上を目指すことである。それと同時に、日本側の研究者が、ラオスを中心としたほかの班の研究との関連を念頭に、建設的・示唆的・教育的コメントを加えることにより、プロジェクト全体の統合性を高めることも意図している。今回参加した日本側メンバーは、秋道智彌リーダーのほか、久保（モノ班班長）、クリスチャン・ダニエル（雲南歴史班班長）、佐藤洋一郎（森林・農業班）、友岡憲彦（森林・農業班）、中村哲（医学班）、金田英子（医学班）、西村雄一郎（ズブズブ班）、宮脇千絵（モノ班）である。台風の影響で、雲南で資源人類学のプロジェクトを行っている篠原教授のグループが参加できなかったのは残念であるが、雲南に長期滞在中の上田信（立教大学教授）氏の参加を得ることができた。

個々の発表について、ここで、ひとつひとつコメントを加えることは避けたい。個別の研究発表に興味のある方は、それぞれの中間報告書にあたってほしい。中間報告書は、①中国語であること、②いずれ最終報告書として刊行を予定していること、から本報告には添付していない。関心のある方は、事務局へ連絡していただきたい。

また、全体会議に、研究の交流と連携強化のため、若手研究者を二人招聘した。雲南大学博物館・助手 譚と雲南西南林学院講師の李建欽であり、それぞれ研究の中間報告を行った。

以下、中間報告会さらに全体集会での中国側の成果報告をもとに、全体の印象について述べておく。

まず、プレゼンテーションの仕方という技術的なことである。多くの発表者が研究の背景や調査地の概要の説明に多くの時間を費やし、肝心な研究結果の提示が不十分なまま発表を終えてしまった。そのため、研究内容に

ついて、討議を重ね、深く分析・考察することができなかった。配布された資料には、多くの場合、臨地調査に基づく詳細なデータが添えられており、データの収集がなされていないわけではなかったのに、一層残念であった。

このことは、実は、プレゼンテーションという技術的なことに、留まっていない。むしろ問題なのは、個々の研究者の目的意識が希薄なことだと思われる。研究を行っている本人自身が、自らの研究成果のどこが「新しく」「興味深い」のか、うまく位置づけられていないのである。そのため、型にはまったステレオタイプな発表となり、個々の研究課題は多様であるにもかかわらず、さらに環境問題（中国の場合、民族問題と重なることが多い）という今日的課題を掲げているにもかかわらず、均質的で、現実感・切迫感が乏しいような印象を受けることになった。

その背景には、生態人類学という分野が、歴史的に構築された中国の学問体系の中で、いまだしっかりとした地歩を得ていないことがある。とりわけ、そのよりどころである臨地研究（フィールドワーク）は、近年ようやく関心をもたれるようになったものの、方法として確立されているとはいいがたい。古今東西の文献を渉猟し、書斎で論考をたてていた「学者」が、辺境の農村におもむき、農民から話を聞き論文を書くことは、われわれの想像以上に、きわめて目新しいことである。

さらに、「民族生態史」という課題が、現実的な問題解決を最終の目的としながらも、記述的な調査を当面の目的としていることもあるだろう。収集した一次資料を整理し、歴史的に位置づける作業を行ったうえで、今日の問題点を抽出するまでには、ある程度時間がかかるだろうと思われる。

最後に、研究の地理的範囲が制限されていることがある。中国（雲南省）国内に限定した調査では、国境を越えたモノと人のダイナミックな動態を知覚・追跡することが困難である。メンバーの多くは、実際には、タイ・ミャンマー・ベトナムの国境近くで調査活動を行っている。しかし国境を越えてのモノ・人・金の動きは、ブラックボックスとなっている。しかし視野を国内にとどめる限り、今日の大きな環境変化の実体であるグローバル化の実態は、逆に、つかみ難いのである。

以上、今回の中間報告会で気づいたことを挙げておいた。

一方で、中国側研究者の個々の研究者の能力と参画意欲は高く、また臨地研究にあたっての言葉や調査の利便性（統計資料や公文書などの収集）などの比較優位は存分に発揮されている。また、雲南大学との連携・協力関係は緊密かつ良好である。プロジェクトはしっかりした基盤の上に、順調に展開しているといえる。今後は、中間報告会などの経験を最大限生かし、雲南班としていっそうの研究の深化を図り、プロジェクト全体の展開に寄与したいと考えている。

## 1-2 雲南・文山地域予備調査（エクスカーション）

この調査行の本来の目的は、中国側のメンバーの調査地を訪問し、現場で議論を重ねることであった。しかし、調査地のほとんどがアクセスの困難なところにあり、時間的制約のため実際に訪問できたのは一調査地（黄貴権氏の調査地）だけとなった。

ここでは、現地で詳細な説明を受けた黄貴権氏の調査地の概要ではなく、より全般的な「雲南民族生態史」の構築の際に留意すべきと思われることを指摘しておきたい。それは、きわめて強力な「均質化」の動きである。

今回訪問したのは文山地域である。民族的には壮族・苗族が優占している。しかし日常生活全般で、控えめにいっても生業面に関しては、漢民族とこうした少数民族は、年を追うごとに、ほとんど区別がつかなくなっている。

たとえば、ゆるやかなカルスト地形の文山は、畑作が生業の中心である。現在、トウモロコシとトウガラシが卓越しているが、漢民族もそのほかの少数民族も、まったく同じようにこの二つの商品作物を栽培しているのである。中国の経済発展により、どちらも需要が急増し市場に持ち込むと「いい金になる」。市場経済は、辺境の少数民族地域も漢民族も同じように巻き込み、生活や景観を均質化していつているのだ。

その一方で、民族的なアイデンティティの揺らぎへの反動から、文化的な民族性を強調する動きも出てきている。たとえば、民族衣装はもっともわかりやすいアイデンティティのラベルである。

こうした「異化」の試みは、簡単に観光とむすびつく。色鮮やかな民族衣装、エキゾチックに加工された歌

と踊り。国内の観光者の急増という背景で、地方政府も、「少数民族」の商品化を推進しているのが現状である。

少数民族の文化的な面では「漢化」が注目されてきた。しかし、生業面における市場経済の浸透を背景とした「均質化」は、より強力であり、効率的な経済活動を通して、漢民族と少数民族の境をますます見えにくくしている。こうした中で、生態人類学の臨地研究は行われ、雲南民族生態史は編まれなければならないのだ。従来の人類学的研究範囲を越えた視野が、必然的に要求されるのである。

## 2 研究計画

「雲南民族生態史」グループの実質的活動は、平成 17 年度が最終年度にあたる。当初計画のとおり、最終報告会を昆明で 10 月後半に開催する。中間報告会は、メンバーのほとんどの調査が途中段階であり、研究の質の向上を図るための「内輪」の発表会であった。最終報告会は、むろんメンバーが中心であるが、発表者をメンバーに限らないことも検討している。より一般向けに公開する国際シンポジウムという形をとりたい。発表した内容は、順次出版してゆく予定である。

また、今回の中間報告会で浮かび上がった課題は、貴重な研究活動の指針となった。手法として、中国ではいまだ萌芽期にある臨地調査、あるいは生態人類学的視点。ブラックボックス化している、国境の向こう側の現状。「雲南民族生態史」グループのメンバーの視野を広げ、問題意識を高める必要がある。

そのため、当初計画にはなかったが、6 月に "Mainland Southeast Asia in Transition: Resource and Eco-history" と題した国際ナショナル・ワークショップを開催することにした。秋道プロジェクトの主要メンバーが、経済発展の著しい中国（雲南）の周辺国の資源・生活・環境にあたえている影響のさまざまな側面をとりあげる。自国内での研究調査にとどまることの多い、中国の若手人類学研究者との交流が主な目的である。

そして今年度は、明確な課題を設定した上で民族・地域横断的な研究を行う「雲南環境史チーム」をいよいよ組織化したいと考えている。

## 資料

### 「生態史項目中期評価会議」プログラム（翻訳）

10 月 11 日 午前 9:00 – 12:00

9:00 – 9:25 主催者趣旨説明

9:00 – 9:10 雲南大学学長挨拶

9:10 – 9:15 雲南大学博物館館長尹紹亭挨拶

9:15 – 9:20 日本総合地球環境研究所・秋道智彌挨拶（プロジェクト代表）

9:20 – 9:25 日本国立民族学博物館・阿部健一挨拶（雲南班代表）

第一セッション 9:25 – 10:25 司会：王東昕、通訳：顔宇

9:25 – 9:55 郭家驥 「双版纳におけるタイ族の水文化の変遷と持続的開発」

9:55 – 10:25 艾懷森 「雲南・騰冲県胆扎村におけるリス族の民族生態史」

10:25 – 10:35 休憩

第二セッション 10:35 – 12:10 司会：郭家驥、通訳：李全敏

10:35 – 11:10 朱力平 「病気の発生と伝播に関する環境分析：雲南の自然環境と社会環境」

11:10 – 11:40 街順宝 「肥料の歴史：紅河石屏地方イ族の伝統的農地分類と地力保持について」

11:40 - 12:10 高志英 「20世紀前半期独龍族の人と自然の関係に関する歴史的研究」  
午後 1:30 - 5:45

第三セッション 1:30 - 3:00 司会：黄貴權、通訳：顔宁

1:30 - 2:00 鄭寒 「変貌する自然利用と管理：瀾滄江流域の一農村を事例に」  
2:00 - 2:30 何蕊丹 「紫茎沢蘭 (Eupatorium odorata) の伝播と拡大：西盟の三農村での調査報告」  
2:30 - 3:00 李全敏 「徳宏州三台山冬瓜徳昂族の茶栽培の変容」

3:00 - 3:15 休憩

第四セッション 3:15 - 5:45 司会：艾懷森、通訳：趙文娟

3:15 - 3:45 崔明昆 「雲南新平県花腰タイ族の環境変容と民族植物的知識・利用の変化」  
3:45 - 4:15 揚雪吟 「老曼峨：布朗族伝統的村落の今昔」  
4:15 - 4:45 揚六金 「原始人的採集生活と生態環境：『莽人』の野生植物利用と保護について」  
4:45 - 5:15 李建欽 「雲南・金平県ハニ族の草果 (カルダモン) 栽培と環境変化の影響」  
5:15 - 5:45 張曉瓊 「雲南・双江邦丙村布朗族の社会発展と環境変遷の記録」

10月12日 午前 8:30 - 12:15

第一セッション 8:30 - 10:30 司会：鄭寒、通訳：李全敏

8:30 - 9:00 張佩芳 「云南西双版纳基諾 (jino) 族の土地利用と土地被覆の変動についてのキーファクター分析」  
9:00 - 9:30 李繼群 「ソバ文化：雲南東南部『花倮』人の文化生態史に関する報告」  
9:30 - 10:00 杜 薇 「云南苗族の生活の中の麻」  
10:00 - 10:30 羅 意 「拉佧 (lafu) 人の生業活動の20年の変化」

10:30 - 10:45 休憩

第二セッション 10:45 - 12:15 司会：張佩芳、通訳：揚雪吟

10:45 - 11:15 黄驥 「高黎貢山の少数民族の黄蓮の伝統的資源管理と生態学的価値」  
11:15 - 11:45 張海超 「屏辺県芥山寨の花苗俗とその放牧活動について」  
11:45 - 12:15 黄貴權 「那寒の瑗族の移動と土地所有権の変化について」

午後 1:30 - 6:00

第三セッション 1:30 - 3:00 司会：黄驥、通訳：李全敏

1:30 - 2:00 曾益群 「景洪における生態環境と焼畑農業の変化」  
2:00 - 2:30 施 紅 「『集落営造学』事始：環境生態史研究の理論と方法  
— 雲南孟連地区タイ族村落の事例」  
2:30 - 3:00 李月英 「阿怒社区の生業活動の変化」

3:00 - 3:10 休憩

第四セッション 3:10 - 5:30 司会：尹紹亭、通訳：趙文娟

3:10 - 3:40 王東昕 「思茅市内移入民の社会と環境：展開と課題」

3:40 - 4:10 張晨煜 「孟連ワ族の生態観念の今日」

4:10 - 4:40 朱映占 「環境生態史：対象・理論・方法—基諾山を事例に」

4:40 - 6:00 総合討論